

4-1-5-5 アレルギー科

1.概要、特色

アレルギー科は小児のアトピー性皮膚炎、食物アレルギー、気管支喘息などをはじめとして様々な小児アレルギー疾患の診療を行っている。現在の日本では小児アレルギー疾患の有病率は非常に高いため、ほとんどの小児科医にはアレルギー診療の心得がある。軽症患者の大半は治療内容に関わりなく年齢とともに自然軽快していくが、一部に自然治癒が期待できない重症患者の存在があり、通常の診療とは異なる水準の対応が必要となる。そうした重症患者とその家族は日常生活に支障をきたし、なかには生命の危機に直面するものもある。国立成育医療センターアレルギー科では、一般的な治療ではコントロールすることが困難な患者を救うことを重要な任務の一つと考えている。そのため、当科の初診時患者構成は重症と中等症が圧倒的に多く軽症患者が少ないという特色がある。もう一つの重要な任務は、新しい標準治療法の開発である。アレルギー疾患の治療は日進月歩であるが、最も副作用が少なく最も効果の高い治療とはどのようなものか、それを知るには現在優劣がつかない複数の治療法を比較する必要がある。このような臨床研究には的確な研究デザイン、倫理委員会の審査、インフォームドコンセント、個人情報保護への配慮等、非常に複雑な手続きを必要とする。そのため、こうした臨床研究は今までの日本では製薬メーカーの新薬開発研究以外ではほとんど行われてこなかった。しかし、こうした壁を乗り越えて臨床研究を行わなければ、欧米で開発された標準治療法の真似をするか経験的な治療法に固執することになる。専門家の経験に基づく不毛の議論で犠牲となるのは患者である。権威を傘に着た議論ではなく科学的な手続きによって、日本の患者にとっても最もよい治療法を開発することがアレルギー科の使命と考えている。

2.診療

2.1 治療方針

アレルギー科では以下に掲げる3つを基本的理念として診療活動を行っている。

(a)Evidence-based Medicine (EBM: **根拠に基づく医療**): 日本だけではなく、海外からも最新の情報を収集し、最も Evidence の水準の高い知見に基づいた治療を提供する。また一方で将来のガイドラインの改定に必要な Evidence を創出するため、臨床研究を企画・実施する。

(b)Narrative-based Medicine & Patient Oriented Medicine (NBM & POM: **患者中心の医療**): 治療方針を医師が一方的に決めるのではなく、まず患者の立場に立って傾聴し、ニーズを正確に把握する。そして双方が納得した上で治療を行う。

(c)Behavioral Medicine (**行動医学**): 従来の生物医学モデルに基づく薬物療法中心の医療ではなく、生物心理社会医学モデルに基づく包括的な医療を目指している。特に重症患者や難治性患者の治療には不可欠のアプローチで、アレルギー診療の分野では世界の最先端をリードしている。

2.2 対象疾患

アレルギー科は様々な小児アレルギー疾患の診療を行っているが平成 16 年度に診療を行った主たる疾患を列記する。

- 1) 気管支喘息、およびそれに合併したアレルギー性鼻炎や副鼻腔炎
- 2) Vocal cord dysfunction、Hyperventilation syndrome
- 3) アトピー性皮膚炎およびその合併症
- 4) 食物アレルギー（運動誘発性食物依存性アナフィラキシー、アレルギー性胃腸炎を含む）
- 5) IgA 欠損症、高 IgE 症候群など免疫異常を伴うアレルギー疾患
- 6) ラテックスアレルギー、口腔アレルギー症候群（OAS）
- 7) 多型滲出性紅斑、蕁麻疹、自家感作性皮膚炎、接触性皮膚炎、薬物アレルギー
- 8) 昆虫アレルギー、動物アレルギー

2.3 疾患教育

- 1) アトピー教室：アレルギー科を受診したアトピー性皮膚炎患児の養育者向けに毎週木曜日に医師および看護師が行った。
- 2) 喘息教室：アレルギー科を受診した気管支喘息患児の養育者向けに毎週火曜日午前中に医師および看護師が行った。
- 3) 子ども向けアトピー教室：主として小学校高学年以上の患児を対象に夏休みおよび春休みに数回実施した。医師、看護師、心理士が担当。
- 4) 子ども向け喘息教室：主として小学校高学年以上の患児を対象に夏休みおよび春休みに数回実施した。医師、看護師、心理士が担当。

2.4 診療構成員（平成16年4月1日～平成17年3月31日の間に在籍した者）

医師：大矢幸弘、野村伊知郎、須田友子、渡辺博子、成田雅美、明石真幸、二村昌樹、斉藤暁美、青田明子、津村由紀 心理士：益子育代、松本美江子、小嶋なみ子

3. 研修

3.1 病棟カンファレンス

毎週月曜日の朝8時-9時、毎週木曜日の午後4時-7時に病棟患者のケースカンファレンスを医師および心理士を中心に定期的に開催。そのほかに病棟別の個別のケースカンファレンスを医師、看護師、心理士、ケースワーカーなどを交えて、非定期的に行った。

3.2 外来カンファレンス

隔週金曜日の午後外来看護師、医師、心理士を中心に定期的に開催。

3.3 抄読会

毎週火曜日の午前8-9時に最新の臨床研究論文の紹介や学会報告などを定期開催。

3.4 院内勉強会

各病棟における看護師または総合診療部など他の部署からの要請に応じて気管支喘息、アトピー性皮膚炎、食物アレルギーなどの勉強会を開催。

3.5 外部研修生の受け入れ

他施設の医師、看護師、心理士、薬剤師、大学院生、医学生などの研修および見学を受け入れた。

3.6 院外研修会および公開講演（学会発表は業績集に別掲）

- 1)
- 2) 平成16年4月22日 大矢幸弘 小児喘息治療における吸入ステロイドと2刺激薬～新しいガイドラインをふまえて～ 府中市小児科医会学術講演会
- 3) 平成16年11月6日 大矢幸弘 患者向け医療情報の信頼性の評価に関する国際研究 - DISCERN 日本語版の開発とアトピー情報の評価および国際比較 第11回ヘルスリサーチフォーラム 東京
- 4) 平成16年11月18日 大矢幸弘 特別講演 EBMと行動医学による小児アトピー治療 第5回京都実地皮膚科セミナー 京都
- 5) 平成16年12月5日 大矢幸弘 アトピー性皮膚炎のEBMについて 第116回神奈川県皮膚科医会例会 神奈川県相模原市

- 6) 平成 17 年 1 月 20 日 大矢幸弘 特別講演「アトピー性皮膚炎の EBM に関する最新の話」鳥取県西部医師会学術講演会 鳥取県米子市
- 7) 平成 17 年 1 月 25 日 大矢幸弘 「子どものアレルギーと行動科学的アプローチ」国立保健医療科学院平成 16 年度思春期保健コース 埼玉県和光市
- 8) 平成 17 年 2 月 16 日 大矢幸弘 気管支喘息及び誤診の多い関連疾患（心因性喘息、VCD について）世田谷・目黒区耳鼻咽喉科医会合同学術講演会 東京
- 9) 平成 17 年 2 月 22 日 大矢幸弘 国立特殊教育総合研究所第三期短期研修「アレルギー疾患の医療と学校保健」 2005.2.22 神奈川県横須賀市

3.7 公開講座および研修会

- 1) 平成 16 年 7 月 15 日 第 3 回成育アレルギー臨床懇話会 大講堂
- 2) 平成 16 年 11 月 11 日 第 4 回成育アレルギー臨床懇話会 大講堂
- 3) 平成 17 年 2 月 24 日 第 5 回成育アレルギー臨床懇話会 大講堂

4. 研究活動

- 1) 気管支喘息の有症率・罹患率および QOL に関する全年齢階級別全国調査に関する研究（分担研究、厚生労働科学研究費補助金 免疫・アレルギー疾患予防・治療研究事業）
- 2) アトピー性皮膚炎の既存治療法の EBM による評価と有用な治療法の普及（分担研究、厚生労働科学研究費補助金 免疫アレルギー疾患予防・治療等研究事業）
- 3) 成育医療における患者・家族の前方視的研究（分担研究 成育医療研究委託事業）
- 4) 小児科産科若手医師の確保・育成に関する研究（研究協力 厚生労働科学研究費補助金 子ども家庭総合研究事業）
- 5) Develop an assessment tool enabling patients to ascertain the reliability of medical information on the worldwide web. (Y.Ohya, J. Batchelor) The Daiwa Anglo-Japanese Foundation